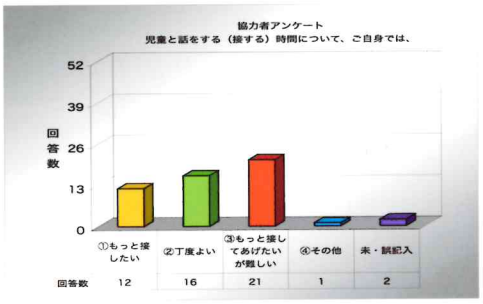
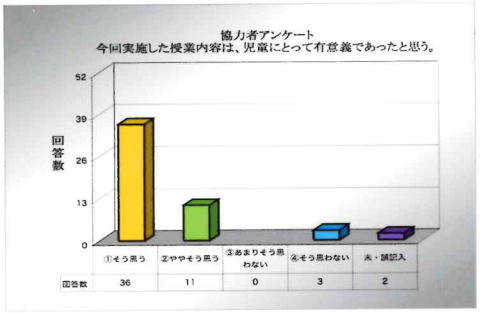
「１人」と答えた児童は約 10%、約 90%の児童には兄弟姉妹がいることになります。そんな子供たちに対し、保護者は児童と「話をする（接する）時間について、ご自身では、」という質問に対し、「もっと接してあげたい」と答えています。だが、「難しい」という背景には「共働き」家庭の増加など・・さまざまな理由が上げられるかもしれません。



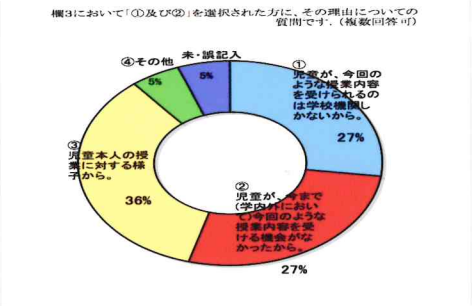
とは言え、保護者は「児童と話をする（接する）時間について、ご自身の児童期と比較してどうか」という質問に対し、「長い」「やや長い」「変わらない」という答えた方は全体の 77%とであり、実施学級の児童は保護者とのコミュニケーションは十分にとれていることが伺えました。そんな児童や保護者にとってこのプロジェクトはどんな意味があったのでしょうか。テーマと照らし合わせながら、検証していきたいと思います。

「学校（公教育）」現場でプロジェクトを行う意義

さて、今回のテーマは「居場所づくり」であり、精神的拠り所となる「思い出」作りでもあります。率直に、協力者に向けてこのプロジェクトは「有意義なものであったのか」と質問しました。すると、約 90%が「そう思う」「ややそう思う」と回答しています。



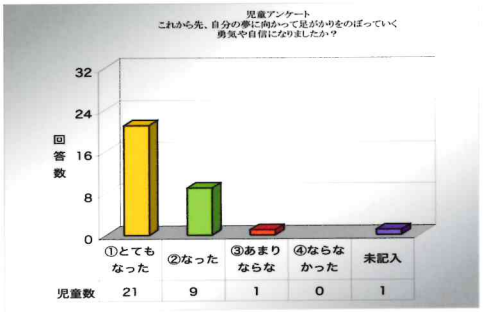
さらに、その理由について尋ねたところ、「児童の授業に対する様子から」「今回のような授業内容を受ける機会がなかったから」「今回のような授業内を学校機関でのみしか受けることができないから」などと回答しています。この結果から「学校」機関でプロジェクトを行った大きな意義があったように思います。



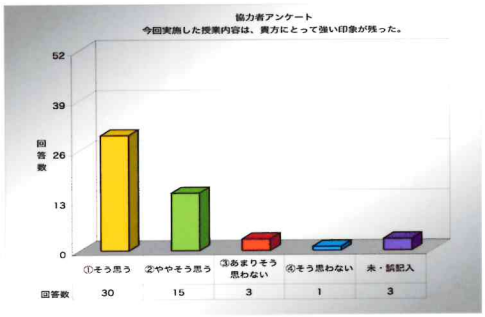
学校機関で行う理由は、「学校」が何人にも平等に与えられる「出会いの場」であるからです。教育を平等に受けられる権利、受けさせなければならないという義務のもと、児童は必ず学校に集まります。そこには、美術や図工など全く関心のない子から、ある子まで本当にさまざまな児童がいます。当たり前のようですが、それがとても大切な視点だと思います。美術館でのワークショップや企業の行う美術の特別教室などとははるかに異なるのです。そういった「ものづくり」に興味のある者だけが集まる場所で行うプロジェクトとさまざまな性格の者が集まる学校で行うプロジェクト、その内容は同じでも効果や狙いが異なってきます。昨今の社会は、選択社会であり大人も子供も時間を何に使うのか、その優先順位を決めて過ごしているように思います。それだけ、やることが多く「忙しい」のです。「忙しさ」は、コミュニケーションの欠如をまねきます。コミュニケーションの欠如は、信頼関係を喪失させます。信頼関係を喪失した人間は、人を信頼することができにくくなります。人を信頼できない人間は、自分中心に物事を判断するようになるでしょう。これは、学童保育所や母子支援施設での経験からの見解です。そこで、生きることに「忙しい」大人や子供の是非を問うのではなく、今回はその解消の一つとして微力ながらこのプロジェクトを行いました。平等に与えられる出会いの場に私が赴くことによって、たった一人でも児童の助けになればと思ったのです。そして、今回のプロジェクトで出会った人たちは私自身にとってもこれからの人生の救いとなり「有意義な」記憶となっています。

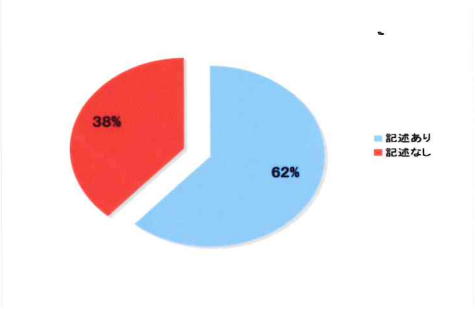
また、児童に対しては「これから先、自分の夢に向かって足掛かりをのぼっていく勇気や自信になりましたか？」と質問しました。すると、93%の児童が勇気や自信がついたと回答しています。

さらに協力者に対して、「今回実施した授業内容は、貴方にとって強い印象が残ったと思う」かどうかについて問いかけてみました。すると、約 87%が「印象に残った」と回答しています。



「印象に残ったという」回答理由を記述形式として質問したところ多くの方が回答しています。





記述された文章の一部を挙げたいと思います。

（ア）３番目の子ですがこの様な授業ははじめてなのでいつまでも記憶に残ると思います。

（イ）普段なかなか言葉にして伝えられない親の思いをこの授業を通して子供に伝えることができたのでとてもよかったと思います。

（ウ）いつも仕事が忙しく子供と接する時間が少ないので足掛かりの布にメッセージを書くことでコミュニケーションをはかることができたから。

（エ）子供達が自分の未来について発表し、周りの大人への想いが伝わったから。

（オ）足掛かり集を拝見し、他の保護者の子を思う気持ちを知ったので。

（カ）大きな作品を子供達の体を使って作ったという所。

（キ）作文の内容がとてもうれしくて忘れられません。

（ク）普段子どもに対して直接には「言葉」という意味のあるものを発していなかったので、布に書くという事によって伝えられたかなと思ったため。

（ケ）今までこのような授業を受けた事もなかったし、聞いた事もなかった。

（コ）子どもが自分に対してどのような思いがあるかを知る事ができた。